

地域ESD活動推進拠点ヒヤリング 日本体験学習研究所 2/2

ヒヤリング結果

- 他の拠点や団体との交流や連携について
特に人材の紹介などのネットワーク連携に期待している。
- 今後のESD推進ネットワークのあり方について
自然と人のつながり、人と人のつながりを大切にしている当研究所としては、人間関係の力を重視している。そのためのインタープリターのスキルアップ事業が重要と考えている。ESD推進ネットワークに対しては、これらの目的に合致した参加者の募集や講師などの人材の紹介等について連携を深めていきたい。
来年度からは、特にESDの本旨に立ち戻り、力を注いでいきたいと考えている。

③（一社）ネクストステップ研究会（三重県四日市市）

地域ESD活動推進拠点ヒヤリング ネクストステップ研究会 1/2

日時：
2019年11月23日
(土)
11:00~12:00
場所：
なべくら高原森の家
(地域循環共生圏づくり研究会開催後)
ヒヤリング対象：
代表 寺田 卓二

参考：全国センターアンケート回答（H30コメント）

- 重視している取り組み
 - ・ESDの推進では主に学校、SDGsの推進では、主に企業、地域
- 拠点の課題、改善提案
 - ・経済的基盤、定常的な収入が確保できていない。
 - ・行政からの委託料講師等の全国調査の実施と引き上げ。
- 好事例
 - ・四日市内外でのESDの取組みが一步ずつ進んでいる。
- 全国・地方センターへの要望
 - ・現在ESDはSDGs推進のための人材育成が具体的な目標になっていると思います。特に市民団体へのSDGs普及に向けたESDプログラムの開発を行ってほしい。

ヒヤリング結果

- ESD活動の経緯と現状について
代表の寺田氏が行っていた四日市市の公害教育、環境教育を経てESDを推進しようとしていた中で、ESDの10年が終了するという事態になり懸念していた。そのタイミングでGAP対応のESD推進ネットワークが立ち上がり、拠点登録することで「本物」のバックボーンが得られ、非常にありがたかった。ESDはSDGsのために最も重要な教育と考えている。

ヒヤリング結果

○拠点登録の経緯と効果について

ESD活動をする上で公的機関のとの接触が必要となるが、代表個人（以前は教職で教育委員会なども）のつながりでは限界があり、組織としてのバックが必要であった。そのような点で、特に一般社団に改組する前の任意団体のころは背後のESDネットワークが見える「信用」という点で効果を感じている。

○他の拠点や団体との交流や連携について

交流情報の内容が物足りない。他の拠点やESDの全国情報をもっと出してほしい。そのため他団体との交流の機会や情報発信を増やしてほしい。

○今後のESD推進ネットワークのあり方について

小中高では学習指導要領にESDに関連した内容が記載されたとはいうものの、まだまだ物足りない。現場の先生は忙しすぎてとてもそこまで目がいかないのが実情である。そのため上層部のESD理解が不可欠である。

例えばこれら教育者を対象とした研究会もしくは研修会を開催し、SDGsの人材育成やESDプログラム活用の視点を持った教育者を育成していくことでネットワークが拡充・強化されるのではないかと。

6 「同時解決事業」における地域支援事務局業務

(1) 採択団体及び中部地方環境事務所との連携

ア 採択団体等との連携、採択事業の進行管理及び連絡・調整

- 進捗状況確認表を次の通り作成し、事業の実施状況・予定などを採択団体、中部地方環境事務所、EPOの3者連絡会・協議会などの場で逐次確認、共有した。

仕様書項目		確認した実施予定内容				
(1) 協議会の設置・開催	・関係者の役割の明確化、取組実施方法の協議等(4回程度開催)	第①回:5/22	第②回:7/4	第③回:12/9	第④回:1/24	
	i) 継続的体制の構築についての議論	協議会①で確認。NPOわおん(森カフェ)、地元銀行:チラシ配架協力。北信森林組合との連携可能性。※森林林業振興会を窓口にした全国販売が保留。※今後、民間との連携を増やしていきたい。				
(2) 平成31年度事業計画の作成	ii) 都市部からの関心・ニーズ等対外的窓口機能についての議論	JTB名古屋と4/24、JTB長野と6/14打合せ。②協議会で情報発信方法等を検討。志賀高原のホテル6社が8/22に視察。県産業フェアへの出展。同じ出展者(鉄工系)との連携の可能性。中高生が部活で環境学習で作業の可能性。				
	事業計画の作成(別途様式あり)	初稿:4/24提出	完成:5/10締切	→→以後も必要に応じて修正		
	公共性・公益性に結びつけた目標設定	協議会①でディスカッション→出てきたアイデアの中から実行可能なものを協議会②で検討。PRツール:他地域自治体・関係機関に成果を宣伝するものとして位置付け。				
	事業の過程の明確化;課題や当初目標と結果との差異の分析	事業計画、業務報告書等に盛り込む。事業以後の目標として:「ソーシャルビジネスのための「プラットフォーム」づくり2年間の「成果」を③協議会でワーキング抽出。				
(3) 事業計画に基づく事業の実施	手法や留意事項等の明確化	事業計画、業務報告書等に盛り込む。				
	ア 実証事業及びプログラムの確立	NPO所属者・利用者等を対象に一定期間を通じた実証事業を実施	5月下旬に1回、7/4協議会②で実施済み。毎月1-2回(夏場、台風被害時除く)、ここからによる作業実施。→日時・人数・実施内容(製作本数等)の記録をとる。			
		実証事業後に参加した個人へのアンケート等の実施	実証実施後(2回実施)、感想等のヒアリング。秋からの作業分についても実施予定。			
		(※必要に応じて)安全性や作業効率向上を目指した環境整備	治具の改善の記録(概要)を報告書に盛り込む。			
	イ 林業関係者等を中心としたログファイヤーの製作講座の実施(近隣施設を活用)(講座1回開催)	7/28主に地区住民を対象に実施済み。祭りの旗竿活用。参加者の1ターン人材や古民家建築事業者をステークホルダー等に位置付け。				
	ウ 交流会及び報告会、セミナーの開催	地域住民を対象にクラフトづくりやログファイヤーの交流会を実施(1回)	7/28上記イと同時開催済み。以後も機会があれば都度実施予定。			
	エ 活動のPR	幅広い対象に本事業の報告会と専門家によるセミナーを同時開催(1回/30人規模/半日)	1/24会場:なちゆらで開催(実施後、協議会④開催)			
活動のPRや製品化に向けた企画会議を実施		協議会①で着火・利用体験等を行った上で、アイデア出し→出てきたアイデアのうち実行可能性を協議会②で検討済み。→③協議会でアイデア実施状況の報告。未実施事項のその後				
モニターを募集し、ログファイヤーの使用感、他製品の要望、林福連携に対する期待等のヒアリングを実施		【対象】上記イ製作講座参加者、キャンプ場(要アンケート回収督促)、ボーイスカウト(台風で保留)、11/23EPOフォーラム参加者にも実施など				
多くの人にストーリーを語れるように、活動内容をとりまとめたPRツールを作成		③連絡会の協議結果をうけて、パワポ等で成果を明示する構成・内容に修正。他地域に本事業を普及するためのツールとする。「成果」は③協議会でもワーキング抽出する。⇒2/23全国報告会での活用				
	ログファイヤーの性能・安全性を確認する燃焼試験等を実施	含水率等の基準・規格等の明確化、品質維持→イ)製作講座時に燃焼実験を実施。撮影画像、メモ等を確認。				
(4) 月次報告書及び進捗管理表(本紙)の提出	月次報告:毎月5日提出	本紙: 予定を記入したものを5/初提出/その後は逐次提出				
(5) 連絡会、成果共有会への参加	連絡会①:4/24	連絡会②:7/4	連絡会③:11/1	連絡会④:12/9協議会③後に1時間程度		
(6) 支援事務局等との連携	適宜実施	成果共有会:2/23				
(7) 報告書(業務完了報告書)の提出	2/17構成案提出	2/28初稿提出	完成・提出期限:3/19(木)			
(8) 旅費、謝金等の支払	適宜実施					

イ 採択団体との連絡会の開催

- 採択団体、中部地方環境事務所、EPO との 3 者による連絡会を次の通り開催し、進捗状況、取組内容・スケジュール等についての協議や確認を行った。

	開催日	主な協議内容
第 1 回 連絡会	4 月 24 日	<ol style="list-style-type: none"> 1. 2019 年度の事業計画の確認 2. 「業務実施状況確認表」による進め方の確認 3. 第 1 回協議会に向けて <ul style="list-style-type: none"> ・メンバーの確認（昨年度からの変更） ・第 1 回協議会での協議事項について確認（EPO として実施したいこと） ・EPO 主催「協働フォーラム」への協力のお願ひ 4. その他
	5 月 22 日 協議会後	<ul style="list-style-type: none"> ・ 次回協議会の開催に向けた打合せを実施。 ・ 次回連絡会を協議会開催前に実施し、GEOC 等の同席が可能な連絡会・協議会として実施することなどを協議。
第 2 回 連絡会	7 月 4 日	<ol style="list-style-type: none"> 1. 2019 年度「業務実施状況確認表」で進捗状況の確認 2. 第 1 回協議会の振り返り 3. 午後の第 2 回協議会についての確認 <ul style="list-style-type: none"> ・ 全体の流れ、役割分担、WG の進め方等の確認 ・ EPO 主催「協働フォーラム」開催の紹介 4. そのほか関連する取組等の報告（地区推進協議会や地域の動き、新しい取組・団体、展開など） 5. GEOC による情報提供等 6. その他 <ol style="list-style-type: none"> (1) 第 3 回連絡会・第 3 回協議会に向けたスケジュール確認 (2) その他
第 3 回 連絡会	11 月 1 日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 業務の実施状況の確認 ・ 第 3 回協議会におけるディスカッションの内容の確認 ・ 「PR ツール」の構成案、「1/24 セミナー報告会」企画案の確認
	12 月 16 日 協議会後	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「PR ツール」の構成案（EPO 素案）の検討 ・ 「1/24 セミナー報告会」登壇者・プログラムの確認、参加者募集の広報展開等に関する確認
	1 月 24 日 報告会后	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2/23 開催全国ギャザリングの提出資料、ブース展示資料について確認 ・ 「PR ツール」（報告会プレゼン資料）の修正事項について確認

(2) 採択団体の伴走支援

- 採択事業が円滑に実施されるよう、目標の設定や助言、地域内外で活動する関係主体や拠点施設等の巻き込み等、必要な伴走支援を次の通り実施した。

実施日等	支援内容	作成資料等
4 月 24 日 第 1 回 連絡会	採択団体の事務局メンバーに対し、本年度の事業内容を確認し、協議会の開催スケジュール、アドバイザーからの（中間評価での）指摘事項への対応などを協議し、必要な指摘・提言等を行った。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事業実施状況確認表（連絡会でヒアリングした内容を整理・反映し、関係者に送付して共有） ・ ログファイアの性能・安全性を確認する燃焼試験等についての資料（業務の一つ燃焼試験で留意すべきことを整理し、団体側事務局へ送付） ・ 長野県内の出展可能な環境イベントリスト（事業 PR が可能なイベントのリストとして団体側へ提供）

実施日等	支援内容	作成資料等
		<ul style="list-style-type: none"> 第1回協議会でのワーキング（ワークショップ）の内容説明資料
5月22日 第1回協議会	改めて同時解決及びSDGsについて説明し、中間評価会議での指摘事項、EPO中部が本事業のPRも兼ねて開催を計画しているイベントなどについても説明した上で、今後の展開、ログファイヤー活用に関するアイデアを抽出するワーキングをEPO中部のファシリテーションにより実施した。	<ul style="list-style-type: none"> ワーキング用シート（A0サイズ） 同時解決、SDGs、中間評価会議での指摘事項、EPO中部主催イベントの説明資料
6月中	7/4開催・第2回連絡会、第2回協議会の実施のための調整、進め方の確認。 連絡会を飯山駅前の飯山市文化交流館なちゅらで開催することになり、会場の使用申請等を行った。	<ul style="list-style-type: none"> 7/4連絡会・協議会の日程調整表、及び両会議で必要な資料等の原案を作成。
7月4日 第2回連絡会	採択団体の事務局メンバーに対し、事業の進捗状況を確認し、第2回協議会の進め方、成果発表に向けたPRツールの内容について協議し、必要な指摘・提言等を行った。	<ul style="list-style-type: none"> 事業実施状況確認表（連絡会でヒアリングした内容を整理・反映し、関係者に送付して共有） 第2回協議会で実施するワーキングの説明用資料
7月4日 第2回協議会	第1回協議会で提示されたアイデアの振り返りとそれをいつまでにどのように進めるか整理するワーキングを進行した。また、福祉施設の人の作業現場を見て、福祉関係分野において、本事業で行うべきことを抽出するワーキングも実施した。	<ul style="list-style-type: none"> ワーキング用シート（A0サイズ） （開催後）ワーキング結果をとりまとめた資料（簡単な時系列に整理したアイデア集）を作成し、事務局メンバーに提示
7月28日 体験講習会 交流会	地域住民等を対象にしたログファイヤーの体験講習会、交流会に同席し、SDGsについての説明を行った。 また、ログファイヤーの燃焼実験を進行した。	<ul style="list-style-type: none"> 講習会の様子、燃焼実験の結果等を撮影した画像を事務局メンバーに提供 製作したログファイヤーをEPO内で解説を掲示して展示
8～9月中	11/23開催協働フォーラムで、同時解決事業のPRも盛り込んだ企画を検討し、関係者への調整を行った。 登壇する島岡未来子先生（早稲田大学教授）に、当日は採択団体のメンバーにアドバイスなどいただけるよう依頼をした。 また、飯山市による「後援」を取り付けた。 フォーラム開催案内チラシには本事業の説明も掲載し、チラシの配布とあわせて本事業のPRも行っていたよう手配した。 11/1実施の3者連絡会の開催準備として、飯山市文化交流館の使用申請を行った。	<ul style="list-style-type: none"> フォーラム開催案内チラシ 飯山市への後援申請書類
10月	10月12-13日の台風被害（飯山市街地浸水）発生による関係者の安否確認、事業の進捗への影響などの確認を行った。	—
11月1日 第3回連絡会	採択団体の事務局メンバーに対し、事業の進捗状況を確認し、第3回協議会の進め方、PRツールの構成案、セミナー・報告会の企画案について協議し、必要な指摘・提言等を行った。	<ul style="list-style-type: none"> 事業実施状況確認表（連絡会でヒアリングした内容を整理・反映し、関係者に送付して共有） 第3回協議会で実施するディスカッションの内容案 本事業1年目までの活動の「見える化プログラム」チャート

実施日等	支援内容	作成資料等
11月23日 EPO主催 フォーラム	EPO主催の協働フォーラムを飯山市で開催し、採択団体も事業PRを行った。また、採択団体の現状、将来展望を念頭に置いた講演を行ったほか、交流会では地域循環共生圏づくりプラットフォーム取組団体やEPO中部協働コーディネーターとの意見・情報交換を行う場づくりを行った。	<ul style="list-style-type: none"> フォーラム資料として、2018年度に採択団体が作成・発行したリーフレット、チラシを配布
12月16日 第3回 協議会	第2回協議会の振り返りと「①今後の事業展開の可能性について」「②福祉施設の人たちによる作業の現場を見て得られたアイデアについて」「③飯山林福連携事業の（2年間の）“成果“とは？”の3題をテーマにしたワーキングの進行を行った。 協議会終了後に、「PRツール」「セミナー・報告会」の企画案の確認、検討を行う事務局打合せを実施した。	<ul style="list-style-type: none"> ワーキング用の資料、シート3種（A0サイズ） （開催後）ディスカッションの結果を整理したとりまとめ資料を作成し、事務局メンバーに提示 事務局打合せで提示した「PRツール」の構成素案
1月24日 セミナー・ 報告会	採択団体主催）セミナー・報告会に登壇、参加してSDGs概論の講演を行った。	<ul style="list-style-type: none"> セミナー登壇の際のSDGs概論の講演資料
1月24日 第4回 協議会	報告会終了後に開催した第4回協議会に出席し、2年間の振り返り、今後の展開について提言を行った。	—
1月	報告会終了後に事務局打合せを実施し、2/23開催全国ギャザリングのプレゼン用資料について確認を行った。また、採択団体側のプレゼン用資料作成の確認、修正案の提示等を行った。	<ul style="list-style-type: none"> 2/23開催全国ギャザリングのプレゼン用資料とブース展示用資料
2月23日 成果共有会	全国ギャザリングで事業の説明、PR、及び採択団体のプレゼンのフォロー等を行った。	—
3月	採択団体の年間業務報告書の作成支援、内容確認等を行った。	—

(3) 環境省及び全国支援事務局との連携

ア 月次報告の提出、全国支援事務局からの照会対応

- 5月に全国支援事務局（GEOC）へ、採択団体作成の「事業計画」を提出した。その後、全国支援事務局からの指摘事項に対し、修正方法の提案等、修正箇所の確認等を行った上で、5月末までに修正計画を再提出した。
- 毎月10日の期日で、採択団体の月次報告とEPOによる支援内容を記載した月次報告書を全国支援事務局へ提出した。
- そのほか全国支援事務局からの問合せや連絡調整等に随時、対応した。

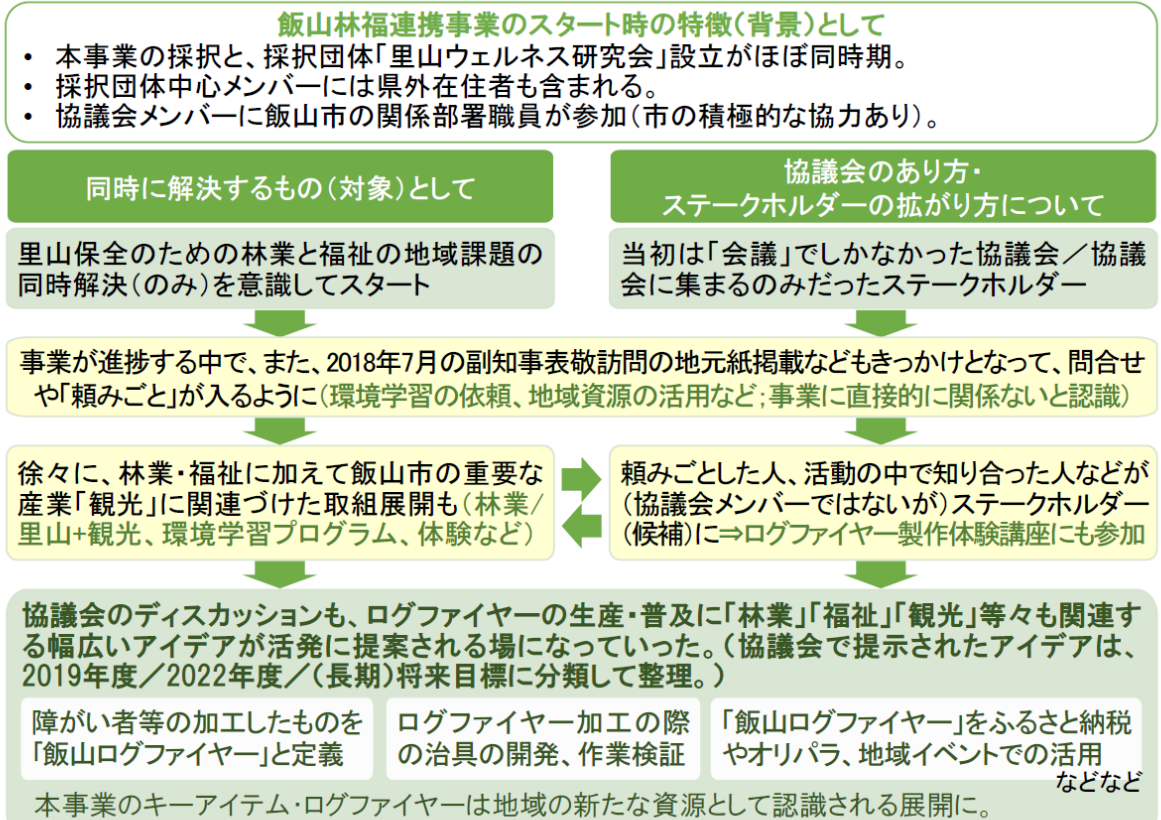
イ 関連会議への出席、資料作成対応等

- 次の全国支援事務局主催の関連会議に出席し、必要な資料を作成・提出した。

開催日	名称	次第項目
6月21日	第1回 同時解決事業形成 会議	開会の挨拶（民間活動支援室 河野室長） 1. 成果の取りまとめにむけて -アドバイザー委員会を踏まえた全国事務局の仮説 -全国委員・地方委員からのフィードバック -採択事例を元にした意見交換 2. 支援事務局振り返り -協働加速化事業と同時解決支援事業との伴走支援の相違点 -年度末報告会（ギャザリング）の企画
11月19日	第2回 同時解決事業形成 会議	1. 成果の取りまとめと成果報告会について 2. 進捗状況の共有 3. 意見交換
2月23日	全国ギャザリング	・同時解決事業の概要説明 ・UNUよりプレゼンテーション ・企画①アピールタイム ・企画②コミュニケーションタイム導入 ・コミュニケーションタイム ・企画③全体ディスカッション ・採択団体コメント ・アドバイザー委員コメント

【作成した全国ギャザリング発表用資料（GEOC 提示フォーマットによる作成）】

⑥同時解決のプロセスの特徴（EPO記入欄）



ローカルSDGsギャザリング2020 (2020.2.23)

⑦SDGsをどう意識したか、活用したか（EPO記入）

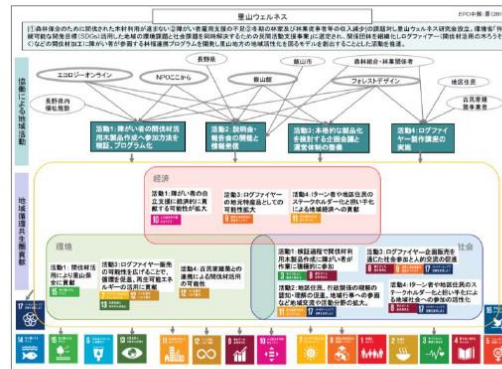


協議会のディスカッション内容をSDGsで振り返り

協議会（2019年度は4回開催）では、毎回最後に、ディスカッションの内容とSDGsとの相関性の振り返りを実施。

EPO中部「活動見える化プログラム」を活用したとりまとめ

2年間の取組の成果や事業の要素、そしてSDGsとのつながりについて整理。



取組の中で既に関わっている／これから関わるSDGsのゴールは何かを改めてメンバーが認識すると共に、まだ触れていないゴールも明確化し、今後の取組の新しいアイデアのヒントを探るディスカッションにつなげている。

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

⑧伴走支援の内容、留意したこと（EPO記入）

主な支援	実施事項	留意事項
事業の進捗管理	①環境省事業としての業務管理 ②事業の進展、SH・地域の状況確認 ③上記①②の関係者間の共有	<ul style="list-style-type: none"> ● 採択団体、REO、EPOの3者連絡会を適宜、実施。 ● 連絡会では、EPOの「業務の進捗状況表」をもとに取組状況、及び事業周辺含めた現地動向等の採択団体からヒアリングし、「進捗状況表」に反映の上、3者で共有。 ● 各取組の展開の仕方については、採択団体に一任。
ディスカッションの進行	ワークショップ方式で取組アイデアを抽出するディスカッションを実施。	<ul style="list-style-type: none"> ● 拡散してよい（お互いの考えを共有する）ディスカッションと、事業を前進させるディスカッションを実施。 ● 後者では、本事業のカギとなる「ログファイヤー販売」「障がい者による作業」の軸がぶれないディスカッションとなるようワーキング用シートなどを工夫。 ● 例えば、取組のアイデア出しでは、「時間軸」をシート上に予め設定するなど。
主催フォーラムでのPRの場づくり	2018年度、2019年度のEPO主催フォーラムを長野市、飯山市で開催。採択団体が登壇して事業PRを行うプログラムを盛り込む。	<ul style="list-style-type: none"> ● 2019年度フォーラムでは、ログファイヤーを活用した「森カフェ」を実施。（これをきっかけに「森カフェ」主宰者とログファイヤーを活用した森カフェ講座のプロジェクトが進行中。） ● 講演として、採択団体による新たな地域ビジネス・プラットフォームの展開を念頭に、地域活動を事業へシフトする際に重要な考え方を提示する内容を依頼。（早稲田大学教授・島岡未来子先生による講演「多様な協働による事業創造に向けて」を実施。）

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

【作成した全国ギャザリングのブース掲示用資料】

飯山林福連携事業の(2年間の) 成果とは …2019.12.16 協議会でディスカッション

本事業での位置づけ
「飯山ログファイヤー」
 障がい者等が加工・生産作業を行ったログファイヤーと位置づけ
「飯山ログファイヤー」の付加価値
 として発信していくこと
 着火しやすい、保存に適しているなどの機能面に加えて、障がい者の方たちが加工・生産作業を行っていること



【課題】間伐された木材利用が進まない
 ・里山の手入れの不足
 ・資源循環が進まない
 ・冬の雪の量が多い

環境

- 障がい者の「森の利用」にもつながっている
- 地域の人々が地元の里山・森・木に関心をもつように；里山の林道整備等(地域側も一部事業費負担あり)にも地域住民の賛成で促進へ
- 里山の間伐した場所にカタクリが生育しはじめた

- 福祉施設の人がログファイヤー生産の加工に携わる生産のため1人を新規雇用
- 福祉施設の人が2年間でのべ約25人が加工作業を行い、飯山ログファイヤー約50本を生産・加工
- 障がいのある方の生活の場の増加、選択肢の増加

社会

【課題】障がい者の雇用支援の不足
 ・里山の整備人口の高齢化、里山の整備人口の減少
 ・地域住民の意識の低下
 ・地域でのつながりが少ない
 ・障がい者の受け入れ場不足

■「森林サービス」産業の取組
 →新たな飯山版「里山サービス」のスタート

経済

【課題】冬期の林家及び林業従事者等の収入の減少
 ・冬場の働き場の不足
 ・新しい木材製品が生まれてこない
 ・地域経済循環が少ない

■ログファイヤー販売(全国)展開

- 地元キャンプ場、ホテル等から発注の動き
- 未利用間伐材に価値を付加
- ログファイヤー製作体験会で地域の林業家や住民にログファイヤーの製作方法を普及(計13人が参加)
- ログファイヤーの規格を明確化
- 飯山ログファイヤーの地域イベントでの活用



<作業した障がい者・施設スタッフの声(作業検証アンケート結果より)>
 ■楽しかった。始めは難しかったけど、やりやすい道具も作ってくれて良かった。■はじめは緊張したけど、少しずつ慣れていった。まだ、緊張はするけど、楽しかった。■施設から出ての作業は利用者のモチベーションが上がったように感じた。■作業を通じて他の人(林業家)と関わり、指導を受けていくにつれて、少しずつご本人が自信をもって活動していく様子が見られた。



飯山ログファイヤーについて

- ・丸太の上部を加工して着火スピード向上。
- ・性能的に向上させたログファイヤーだが、チェーンソーを扱える人にはすぐにつくれる。

- ➡ その他の付加価値が必要
- ➡ 木の皮を剥くことによるメリットや付加価値を検討

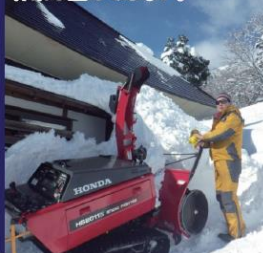
- 見た目がきれい；イベント、セレモニー向き・・・用途の明示で多用途化
- 木くずがあまり出ない；汚れにくい・・・店舗販売、贈答用
- ムシが入りにくい；長期保存に良い・・・防災用？
- 皮むきは慣れると比較的簡単、そして楽しい

⇒福祉施設の利用者に作業をお願いができる
 ⇒「林福連携」展開の検討へ・・・

【背景】
 飯山市の林業と人工林について



豪雪地のため冬期は林業以外の別の仕事をせざるを得ない。林業は盛んではない。



チップかバイオマス発電用にしか使えないような質の悪い木材。経済的な価値は低い。

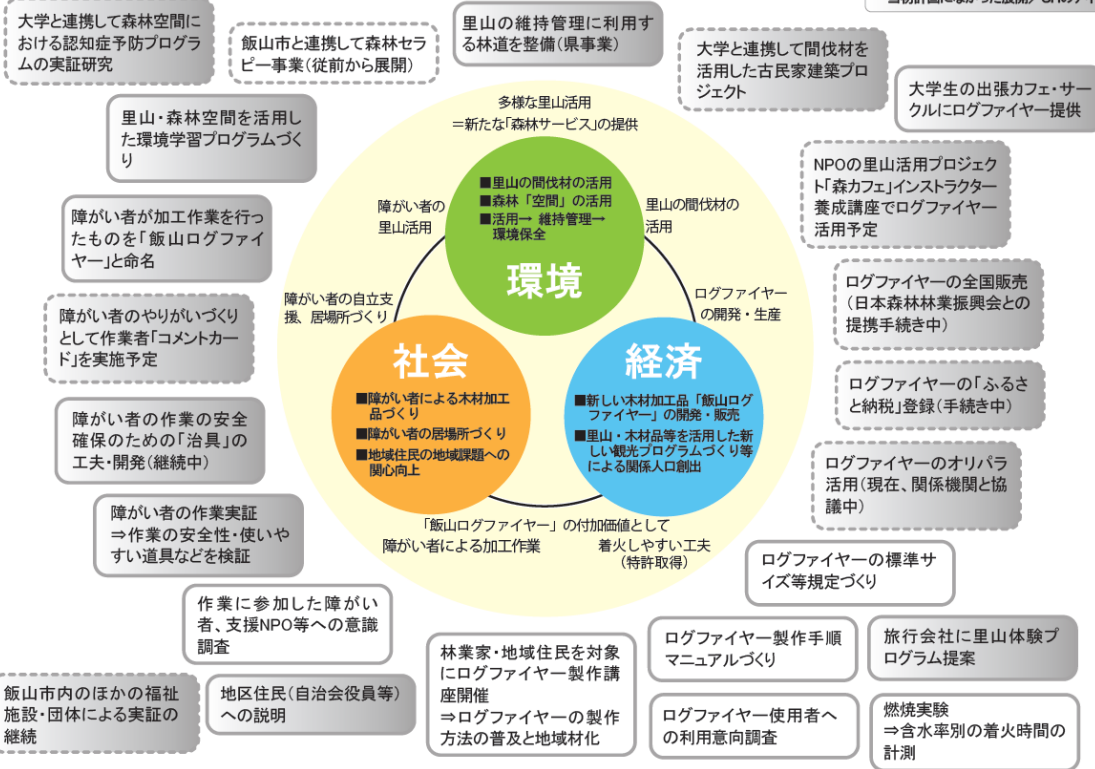


2年間の取組

間伐材の活用+森林空間の活用の仕組みづくり →地域の里山に対する関心向上、関係人口の創出

2年間に実施したこと | 実施中・実施予定の取組
当初計画になかった展開/SHのアイデアを実施

障がい者による木材加工作業を実証
↓ 自立支援 ↓ 木材加工品の付加価値として発信

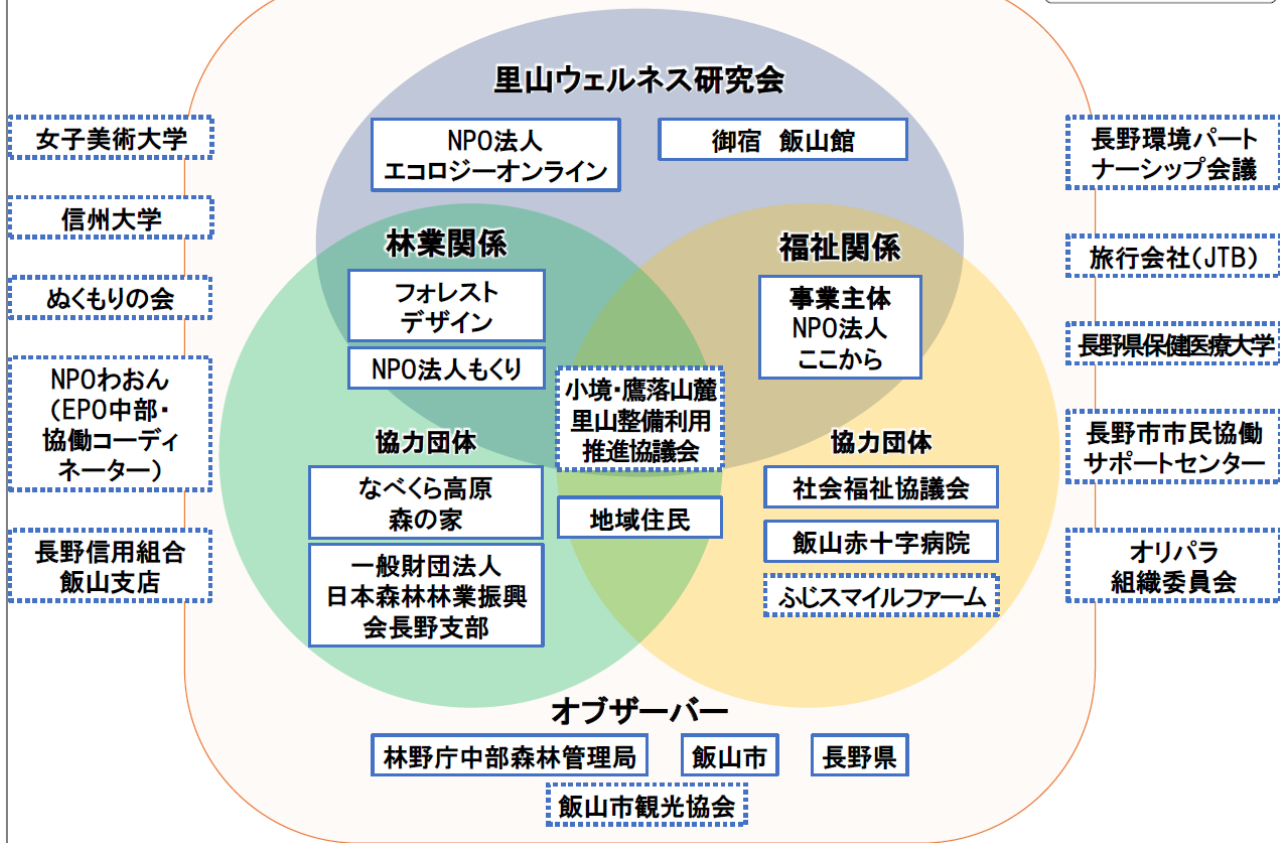


間伐材でログファイヤーの生産・販売、地域に普及
↓ 未利用間伐材に付加価値創出して活用

ステークホルダー (2020年2月現在)

□: 当初からのSH
□: 事業を進める中で協力のあったSH

飯山林福連携推進協議会



飯山林福連携事業の主な活動

2018年度	2019年度
3月 「里山ウェルネス研究会」設立	4月 旅行会社(JTB中部)を訪問して事業説明とログファイヤー活用に関する意見交換を実施
6月 環境省事業「SDGsを活用した同時解決事業」に里山ウェルネス研究会の「飯山林福連携事業」が採択	5月 市担当者の異動等に伴う担当部署・担当者等への事業説明を実施 NPO法人ここからの施設利用者によるログファイヤーの皮むき作業の実証
8月 同時解決・全国キックオフ(全国8採択団体が集結)で事業の取組内容をプレゼン 飯山林福連携推進協議会プレ会議を開催	地元信用金庫を訪問して事業の説明と協力依頼 第5回目の協議会(昨年度振り返り、ログファイヤー着火実験、課題解決ワーキング)を開催
9月 長野県副知事への表敬訪問で同時解決事業採択を報告、飯山市長への表敬訪問で飯山林福連携事業を報告 第1回目の協議会(事業内容の共有)を開催	6月 旅行会社(JTB長野支店)と事業活用ツアープログラムの開発や企業向けツアーパッケージに関する意見交換を実施
10月 第2回目の協議会(委員との意見交換会)を開催 第3回目の協議会(製品企画会議)を開催 中部森林管理局との情報共有・意見交換を実施	7月 第6回目の協議会(障がい者による作業視察と作業向上のためのワーキング)を開催 地域の林業家・住民等への普及を目的としたログファイヤー製作講習会を開催、ログファイヤーの含水率別の燃焼実験を実施 大分県日田市議会の視察を受入
11月 拠点地区となる境地区住民総会で事業説明 ログファイヤーの製作準備に着手 「市報いいやま」にて市重点政策の一つとして「障がい者雇用と里山保全とをマッチングした連携事業(林福連携)」推進が明記	8月 市担当部署との取組状況報告と意見交換を実施 飯山市のケーブルテレビ(ネット飯山)を訪問してPR協力依頼
12月 障がい者施設を運営する「NPOここから」の入所者によるログファイヤー製造における皮むき作業の実証を開始	9月 NPO法人ここからの施設利用者による作業実証 地区のお祭りで大型ログファイヤー1本を奉納 宿泊予約サイト運営企業を訪問してログファイヤー活用プランを提案、意見交換を実施
1月 ログファイヤーが間伐・間伐材利用推進ネットワーク主催の間伐・間伐材利用コンクール受賞で審査委員長奨励賞を受賞	10月 NPO法人ここからの施設利用者による作業実証 長野市産業フェアにログファイヤーを出展
2月 障がい者雇用・支援を行う県内事業者に障がい者雇用方法の現状・課題等をヒアリング	11月 中部森林管理局局長、オリパラ事務局、林野庁木材利用課とログファイヤー活用展開の意見交換
3月 第4回目の協議会(2018年度事業の報告と意見交換)を開催 協議会の開催(主にアイデア抽出、情報交換) 関係者等への事業の説明・打合せ・PR等 作業実証や実験・調査等	12月 第7回目の協議会を開催 NPO法人ここからの施設利用者による作業実証
	1月 日本森林林業振興会長野支部によるログファイヤー販売手続を実施 セミナー報告会で事業の2年間の取組・成果を発表 第8回目の協議会(事業の振り返り、まとめ、今後についての確認)を開催
	2月 同時解決成果共有会「ローカルSDGsギャザリング2020」で飯山林福連携事業の取組・成果を報告

(4) 加速化事業採択案件に対する照会等対応

- 今期、中部地域の過去の加速化事業採択案件に対する照会や問合せ等は、特に寄せられなかった。

7 EPO 中部のこれまで集積したネットワーク及びノウハウの整理

(1) EPO 中部関連の過去報告書の整理

- 第4期までにEPO中部が集積してきた中間支援組織の関わる事例等を各主体（中間支援組織、活動主体、行政）の観点からノウハウ・業務などを中部地方の取組事例として整理し、翌年度の公表に向けPRツール（ウェブサイト含む）の検討を行った。
- 検討の結果、EPO中部関連の公開可能な全ての過去報告書のリスト整理と、報告書に掲載されている主催イベントの抽出、データ化を行った。

【イベント／登壇者リストの一部】

No.	CD整理No.	年度(西暦)	報告書名	イベント名	登壇者氏名	登壇者／肩書き	登壇形式:講演/PD	登壇タイトル	備考
1	EPO-02	2005	平成17年度中部環境パートナーシップオフィス運営業務報告書(10-12月期)	東邦ガス株式会社「環境レポート2005」を読む	磯村 隆英	東邦ガス株式会社 環境部環境推進グループ係長	講演	「企業からの情報提供に市民はどう応えるか～双方向のコミュニケーション、対話の場の視点から～」	
2	EPO-02	2005	オープンフォーラム第1部報告書最終	環境省中部地方環境事務所 中部環境パートナーシップオフィス 「パートナーシップがつくる持続可能な地域社会」オープン記念フォーラム	稲垣 隆司	愛知県環境部長	PD	「地域からの環境パートナーシップづくり-EPO中部に期待すること」	
3	EPO-02	2005	オープンフォーラム第1部報告書最終	環境省中部地方環境事務所 中部環境パートナーシップオフィス 「パートナーシップがつくる持続可能な地域社会」オープン記念フォーラム	千頭 聡	日本福祉大学情報社会科学部 助教授 中部環境パートナーシップオフィ ス運営検討会座長	PD	「地域からの環境パートナーシップづくり-EPO中部に期待すること」	
4	EPO-02	2005	オープンフォーラム第1部報告書最終	環境省中部地方環境事務所 中部環境パートナーシップオフィス 「パートナーシップがつくる持続可能な地域社会」オープン記念フォーラム	筒井 信之	株式会社創建代表取締役社長 社団法人環境情報科学センター 評議員	PD	「地域からの環境パートナーシップづくり-EPO中部に期待すること」	
5	EPO-02	2005	オープンフォーラム第1部報告書最終	環境省中部地方環境事務所 中部環境パートナーシップオフィス 「パートナーシップがつくる持続可能な地域社会」オープン記念フォーラム	村上 千里	特定非営利活動法人持続可能な 開発のための教育の10年推 進会議事務局長	PD	「地域からの環境パートナーシップづくり-EPO中部に期待すること」	
6	EPO-02	2005	オープンフォーラム第1部報告書最終	環境省中部地方環境事務所 中部環境パートナーシップオフィス 「パートナーシップがつくる持続可能な地域社会」オープン記念フォーラム	奥山 哲也	みえ環境創造リーグ 環境県民 運動推進委員	PD	中部7県パートナーシップ・ラウンドトーク	
7	EPO-02	2005	オープンフォーラム第1部報告書最終	環境省中部地方環境事務所 中部環境パートナーシップオフィス 「パートナーシップがつくる持続可能な地域社会」オープン記念フォーラム	真田 俊子	特定非営利活動法人エコプラザ さばえ事務局長	PD	中部7県パートナーシップ・ラウンドトーク	
8	EPO-02	2005	オープンフォーラム第1部報告書最終	環境省中部地方環境事務所 中部環境パートナーシップオフィス 「パートナーシップがつくる持続可能な地域社会」オープン記念フォーラム	戸田 修史郎	社団法人いしかわ環境パート ナーシップ県民会議事務局長	PD	中部7県パートナーシップ・ラウンドトーク	
9	EPO-02	2005	オープンフォーラム第1部報告書最終	環境省中部地方環境事務所 中部環境パートナーシップオフィス 「パートナーシップがつくる持続可能な地域社会」オープン記念フォーラム	辻 英之	特定非営利活動法人グリーン ウッド自然体験教育センター事 務局長	PD	中部7県パートナーシップ・ラウンドトーク	
10	EPO-02	2005	オープンフォーラム第1部報告書最終	環境省中部地方環境事務所 中部環境パートナーシップオフィス 「パートナーシップがつくる持続可能な地域社会」オープン記念フォーラム	萩原 喜之	特定非営利活動法人地域の未 来・支援センター代表理事	PD	中部7県パートナーシップ・ラウンドトーク	

(2) アーカイブとしての活用・公開に向けて

- 第1回 EPO 中部運営会議、中部地方 ESD 活動支援センター企画運営会議の委員、及び EPO 中部・協働コーディネーターに過去報告書の活用方法について諮ったところ、アーカイブとして活用できるよう公開する提案があった。
- そのため、全ての過去報告書に掲載されている（過去に EPO が主催等した）セミナー・フォーラム等イベントの抽出を行い、登壇者と登壇タイトル等をリスト化する整理を行った。
- EPO 中部ウェブサイト過去の全報告書のリスト及び閲覧ファイルを掲載・公開できるよう、登壇者・登壇タイトル等の検索可能なリストとして作成し、EPO ネットワーク人材リストとしての活用・公開が可能になるよう整理を行った。

8 環境基本計画に沿った環境教育支援業務

(1) 実施概要

ア 多様な主体との連携 / ワークショップの実施

① 内容（インプット）

前年度の環境基本計画に沿った環境教育支援業務において開催した、SDGs 理解インプット・セミナーを経て構築できた 11 団体とのネットワークを基盤に、今年度は新たなステークホルダーの巻き込みも図りながら、地域主体の SDGs 普及促進の深化、及び地域のネットワーク構築を目指し、富山県南砺市と黒部市にて、地域ステークホルダーと連携し、「地域循環共生圏」と「同時解決事業」をテーマとした実践セミナーを実施した。

協働実施パートナー

(ア) 南砺市セミナー：南砺市、北酸株式会社

(イ) 黒部市セミナー：黒部社会福祉協議会、大高建設株式会社、NPO 法人 明日育、（一社）でんき宇奈月

② 結果（アウトプット）

企業や大学等、多様な主体 26 団体（昨年度の団体からは 6 団体）、延べ 75 名の参加があった。内容については、アンケートに協力いただいた方々の 100%から「良かった」「大変良かった」との評価を得た。また「事後の取組へのヒントが得られたか」との問いにも 80%以上の方々から「得られた」「大いに得られた」との回答を得た。

イ 事後の変化（アウトカム）

事後、参加者への電話や直接会ってのヒアリングから、本セミナーを経て協働事業化が進んだり、自団体での SDGs 実践体制に取り入れるなどの、具体的な変化が生じている例を複数確認した。

ウ 考察及び今後について

この 2 年で、富山県を中心とした主に自治体・企業・団体間で、互いにコンタクトを取りあえる継続的なネットワークの基礎を築くことができた。また、研修に参加したステークホルダーは、研修で取り上げたキーワード「パートナーシップ」「同時解決」「地域循環共生圏」を取り入れた具体的な活動を展開しつつあるため、教育支援の面でも効果を上げていると言える。

3 年目となる次年度は、これら事例の発信と共に、現段階では関係性の薄かった教育分野との連携を主軸とし、地域における自発的・継続的・相乗的な SDGs 普及促進体制（ネットワーク）の構築（完成）を目指した事業を行いたい。

(2) 多様な主体との連携 / ワークショップの実施

ア 南砺市

(ア) 開催概要

- 日時：2019年8月26日（月）13:30～16:30（10:00～12:00 見学会）
- 場所：南砺市クリエイタープラザ（多目的ホール/カフェトリアン）
- テーマ：地域循環共生圏
- 講師：渡部厚志 氏（公益財団法人 地球環境戦略研究機関 I G E S 持続可能な消費と生産領域 主任研究員/リサーチマネージャー）
- 共催：南砺市 / 協力：北酸株式会社
- 参加者：37名12団体（※前年度参加団体）

所属団体	参加者数
南砺市※	9
北酸株式会社※	12
大高建設株式会社※	2
wood studio 株式会社	2
YKK（個人参加）	1
クリア家具合同会社	1
とうざわ印刷工芸株式会社	1
となみ青年会議所	4
なんと未来支援センター	1
株式会社島田木材	1
千代田オフセット株式会社	1
北陸電力	1

(イ) 内容

【見学会（10:00～12:00）】

セミナーのオプションとして実施。南砺市エコビレッジ推進課の引率の下、20名が参加。南砺市ペレット工場、桜ヶ池クアガーデン（ペレットボイラー）、古民家移築コミュニティースペース「かず良」の3カ所を巡り、地域循環共生圏の基盤について知見を深めた。



① 基調講演「SDGs と地域循環共生圏」

公益財団法人 地球環境戦略研究機関 I G E S 主任研究員 渡部厚志氏

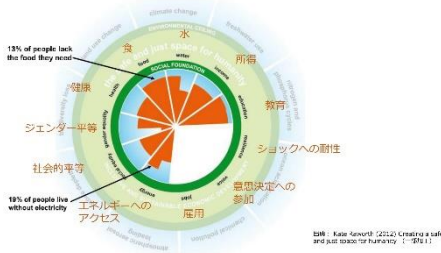
要旨) SDGs は地域を元気にするために活用できる。ずっと先の、社会全体のことまでを最初から考えなくてもいい。地域循環共生圏は、地域の大事なものを活かし、地域の社会と経済を元気にする。具体的な実践方法は、SDGs のゴール同士の関係性・相乗効果を考えながら、エントリーポイントを見つけ、動きながら学んでいくこと。そうすることで、やっていることが地域のどこに効くのかが見えてきたり、次第にやりたいことや仲間が広がっていく。



【発表スライド】

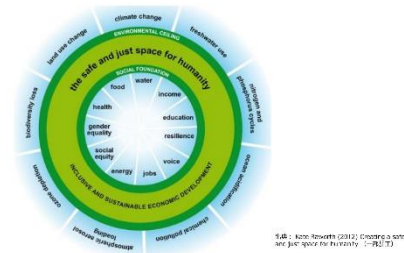
<p>①</p> <h2 style="text-align: center;">SDGsと地域循環共生圏</h2> <p style="text-align: center;">渡部厚志 公益財団法人地球環境戦略研究機関</p>	<p>②</p> <h3 style="text-align: center;">今日、お話すること</h3> <ul style="list-style-type: none"> • SDGs <ul style="list-style-type: none"> • 2030年、2050年...遠い将来の社会を思い描くということ • 地域循環共生圏 <ul style="list-style-type: none"> • 地域の大事なものを考えるということ • 動きながら学ぶ
<p>③</p> <h2 style="text-align: center;">SDGs</h2> <p style="text-align: center;">持続可能な開発目標</p>	<p>④</p> <h3 style="text-align: center;">SDGs: 持続可能な開発目標</h3>  <p style="text-align: center;">SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS</p>
<p>⑤</p> <h3 style="text-align: center;">SDGs: なぜ変化が必要なのか</h3> <ul style="list-style-type: none"> • 全世界で8億3,600万人が極度の貧困（1日1.9ドル（約190円）未満で生活）、9人に1人（7億9,500万人）が栄養不良 • 全世界で26億人が安定的な電力供給を受けていない、8億人が水資源にアクセスできない、25億人がトイレ・公衆便所等の基本的衛生サービスを利用できない、40億人以上がインターネットを利用できない • 世界の子どもの4人に1人は発育不全、毎年600万人以上が5歳になる前に死亡 • 世界の失業率数は、2012年に約2億200万人（内、約7,500万人は若い女性と男性） • UNHCRの庇護対象となる難民の数は、2014年半ばの時点で1,300万人 • 腐敗や横収め、窃盗、租税回避により、途上国に年間1兆2,600億米ドルの損害 • 世界の二酸化炭素排出量は1990年以來、50%近く増加 • 都市は地球の陸地部分の2%だが、世界のエネルギー消費の60~80%、炭素排出量の75%を占める • 毎年13億トンの食料が無駄に廃棄 • 確認されている8,300の動物種のうち、8%は絶滅し、22%が絶滅の危険 • 2050年までに世界人口が96億人に達した場合、現在の生活様式を持続させるためには、地球が2つ必要 	<p>⑥</p> <h3 style="text-align: center;">SDGs: 地球の容量</h3>  <p style="text-align: center;">地球の限界 (フュアスター・バウンダリー) による地球の状況</p>

SDGs: 持続可能な世界の社会的基盤



⑦

SDGs: 地球の容量内での社会的基盤の確保



⑧

SDGs: 持続可能な開発目標

- 「持続可能な開発のための2030アジェンダ」
2015年9月の国連総会全会一致で採択
- 持続可能な開発目標 (SDGs)
 - 2030アジェンダの中核にある17ゴールと169ターゲット
 - 持続可能な開発の三側面 (経済、社会、環境) を含む
 - ゴールおよびターゲットは、統合的で、分割不可で、相互に関連
 - ターゲットは地球レベルの目標
 - 法的拘束力はなく各国が自主的に取り組む
 - 各国政府は自国のターゲットを設定可能
 - 全てのステークホルダーによる実施

⑨

SDGs: 持続可能な開発目標

- あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる
- 健康を終わらせ、食糧安全保障および栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する
- あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する
- すべての人々への包摂的かつ公平な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する
- ジェンダー平等を達成し、すべての女性および女児の能力強化を行う
- すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する
- すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する
- 包摂的かつ持続可能な経済成長、およびすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用(ディーセント・ワーク)を促進する
- 途都(レジリエント)なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進

⑩

SDGs: 持続可能な開発目標

- 各国内及び各国間の不平等を是正する
- 包摂的で安全かつ強靭(レジリエント)で持続可能な都市および人間居住を実現する
- 持続可能な消費生産形態を確保する
- 気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる
- 持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する
- 陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対応、ならびに土地の劣化の防止・回復及び生物多様性の損失を防止する
- 持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する
- 持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化させる

⑪

SDGs: 日本の現状

- 一人親家庭 (大人1名+子ども) の貧困50.8%
- 相対的貧困率15.7%
- 子どもの貧困率13.9%
- 食料自給率 37%
- 2060年には人口の4割が65歳以上に 医師・看護師不足
- 世帯収入や地域による進学率格差
- 女性の社会参加率OECD29国中28位
- 2035年には男性の3割、女性の2割が生産年齢
- 平均年間労働時間、先進国中2位の長さ
- 非正規雇用の増加
- 中小企業、農林漁業の後継者不足
- インフラ老朽化
- 買い物客者の増加
- 食品廃棄600万トン/年
- ヒートアイランド・グリラ豪雨対策...

⑫

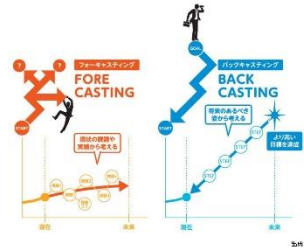
SDGsとMDGs

- SDGs : MDGs (ミレニアム開発目標、2005-15) の継承

	MDGs	SDGs
誰の目標?	国連・政府 (開発専門機関)	国連、政府、企業、NGO、市民 (すべての人々)
何を示す目標?	貧困解決のために「何をすべきか」	世界が持続するには2030年の世界は「どうなっていないといけないか」 → 「バックキャスティング」
どの分野?	貧困・飢餓・健康・教育	貧困・飢餓・教育・仕事・気候変動・生態系・インフラ・政治と社会への参加... → 「統合的アプローチ」

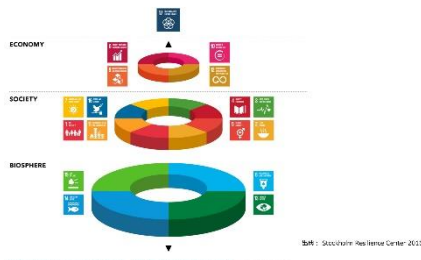
⑬

SDGs: バックキャスティング



⑭

SDGs: 統合的アプローチ



⑮

SDGs: どこから手を付ける?

- バックキャスティング
...15年、35年先の「ありたい姿」???
- 統合的アプローチ
...そんなに複雑なこと、一度に考えられない
...行政の計画に書かれて終わりののでは?

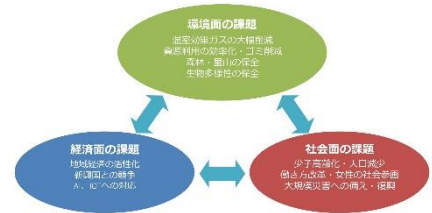
⑯

地域循環共生圏

SDGsのローカルな実現に向けて

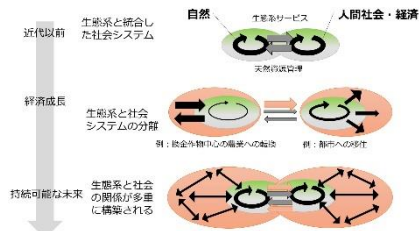
17

地域循環共生圏：相互関連する複雑な課題



18

地域循環共生圏：自然と社会・経済



19

地域循環共生圏

- ・経済・社会・環境の課題への同時対応
- ・低炭素社会・循環型社会・自然共生社会の統合



20



21

地域循環共生圏：どこから手を付ける？

- ・SDGsと同じく...ずっと先の、自然・経済・社会のこと全部を考えて動くなんて...

22

地域循環共生圏：事例

コウノトリと共に生きる (兵庫県豊岡市)

- ・ 生態環境悪化による絶滅危機
- ・ 人工繁殖・放鳥
- ・ コウノトリの生態環境を確保するため、農業・化学肥料に頼らないコウノトリ目家菜一帯行農業の1.3-1.5倍の価格で農家の所得増
- ・ コウノトリリズム
- ・ 小中学校のふるさと教育

ホップ和紙開発 (岩手県立遠野緑峰高等学校)

- ・ ホップ生産者の高齢化・後継者不足
- ・ 従来は程果(ビール原料)以外ほとんど燃却
- ・ ホップの農から残株を抽出、ホップ製練100%・無害の和紙づくりに成功。
- ・ 農業・環境・木材加工の協力で商品開発
- ・ 卒業計画など教育に活用

23

全体・個別ではなく関係と入り口を考える

考え方1
ネガティブループを考える



地域の課題を個別でなく関係で考える

24

全体・個別ではなく関係と入り口を考える

考え方2
ポジティブループへ変えるためのエントリーポイントを見つける

地域全体を少しずつ元気にしていく発想



25

全体・個別ではなく関係と入り口を考える

考え方3
今あるものをエントリーポイントだと考えてみる

- 1)何に効く?
- 2)誰が仲間になる?
- 3)他のものとのつながる?



26

動きながら学ぶ

アルメニア高地の太陽光活用におけるエンターポイントの活用



27

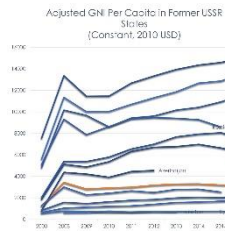
動きながら学ぶ：アルメニア高地の太陽光活用

- アルメニア
 - 旧ソビエト連邦から独立
 - 人口約300万人 (世界のアルメニア系人口1000万)
 - ソビエト時代は化学工業で繁栄
 - 独立後、経済停滞・人口流出
 - エネルギーはロシアの天然ガスに依存



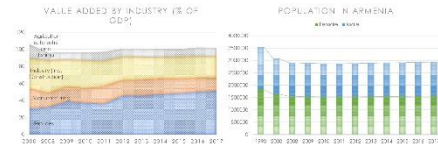
28

動きながら学ぶ：アルメニア高地の太陽光活用



29

動きながら学ぶ：アルメニア高地の太陽光活用



30

動きながら学ぶ：アルメニア高地の太陽光活用

- 高地・農村地域の課題
 - 経済停滞 → 限られた仕事・収入
 - 高い燃料代 → 学校・幼稚園・コミュニティ活動の制限
 - 豊富だが使われていない太陽光

31

動きながら学ぶ：アルメニア高地の太陽光活用

- 太陽光を活用したコミュニティ開発
 - 太陽光によるドライフルーツ製造 (家庭)
 - ソーラー調理器による燃料代削減 (家庭)
 - ソーラー温水器による燃料代削減 (学校・幼稚園)
 - ソーラーパネルによる街灯 (村の中心街)



32

動きながら学ぶ：アルメニア高地の太陽光活用

- やってみてわかったこと (計画通りにはいかない...)
- 行政 (村長・村役場) の非協力的態度 (女性蔑視)
- 技術的な課題：ソーラー調理器は冬場に使えない
- 実施面の問題：ドライフルーツ製造の全面着手前に冬が到来

33

動きながら学ぶ：アルメニア高地の太陽光活用

- 走りながらの学習・チーム構築
- 活動の再検討

原案	実施
ソーラー調理器	中止
家庭のドライフルーツ製造	家庭+女性センター
学校 (調理・血洗い) のため	幼稚園 (調理・血洗い+プール) に設置
街灯	公共施設のある地区への掲灯

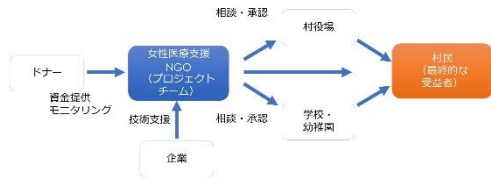


- 村行政との話し合い継続

34

動きながら学ぶ：アルメニア高地の太陽光活用

- 役割分担 (計画)



35

動きながら学ぶ：アルメニア高地の太陽光活用

- 役割分担 (現実)



36

<p>動きながら学ぶ：アルメニア高地の太陽光活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メリットの共創・共有 ドライフルーツ製造 ◎ 家庭 & 女性センター 所得 燃料費節約 健康な保存食 温水器 ◎ 幼稚園 労働者の健康 子どもの活動 街灯 ◎ 村の中心地区 社会活動への参加 自信・意欲向上 a) 身近にある資源を活用できる b) 今までと違う生活を作ることができる 	<p>動きながら学ぶ：アルメニア高地の太陽光活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アダプティブ・インプリメンテーション (動きながら学び、やり方を変えていく) ・活動：技術のよりよい使い方 ・パートナー：行政や教員たちとの強い連携、ドナー・企業の関与 ・ゴール：技術導入ではなく住民が自信を持つこと 												
<p>動きながら学ぶ：アルメニア高地の太陽光活用</p> <p>単純な問題、複雑な問題、複雑な問題 (Westley et al. 2006)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>単純 (Simple)</th> <th>煩雑 (Complicated)</th> <th>複雑 (Complex)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ケーキを焼く レシピが不可欠</td> <td>月にロケットを送る 厳密な計画や公式が必要</td> <td>子供を育てる 厳密な計画は部分的にし か役立たないか逆効果</td> </tr> <tr> <td>レシピは誰がやってもう まく行くように検証済み</td> <td>一度ロケットを月に到達 させれば次回から成功率 が上昇</td> <td>子供を一人育てれば経験 にはなるが、下の子ども うまくいく保障はない</td> </tr> <tr> <td>レシピがよければ毎回ほ ぼ同じケーキが焼ける</td> <td>ロケットの成功条件は毎 回必ず一緒</td> <td>子供は唯一無二の存在、 個として理解しなければ ならない</td> </tr> </tbody> </table>	単純 (Simple)	煩雑 (Complicated)	複雑 (Complex)	ケーキを焼く レシピが不可欠	月にロケットを送る 厳密な計画や公式が必要	子供を育てる 厳密な計画は部分的にし か役立たないか逆効果	レシピは誰がやってもう まく行くように検証済み	一度ロケットを月に到達 させれば次回から成功率 が上昇	子供を一人育てれば経験 にはなるが、下の子ども うまくいく保障はない	レシピがよければ毎回ほ ぼ同じケーキが焼ける	ロケットの成功条件は毎 回必ず一緒	子供は唯一無二の存在、 個として理解しなければ ならない	<p>まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SDGs: <ul style="list-style-type: none"> ・地域を元気にするために活用できる ・ずっと先の、社会全体のことまでを最初から考えなくてもいい ・地域循環共生圏 <ul style="list-style-type: none"> ・地域の大事なものを活かし、地域の社会と経済を元気にする ・エントリーポイントを見つける <ul style="list-style-type: none"> →動きながら学ぶ →やっていることが地域のどこに効くのか見えてくる 次第にやりたいことや仲間が広がっていく
単純 (Simple)	煩雑 (Complicated)	複雑 (Complex)											
ケーキを焼く レシピが不可欠	月にロケットを送る 厳密な計画や公式が必要	子供を育てる 厳密な計画は部分的にし か役立たないか逆効果											
レシピは誰がやってもう まく行くように検証済み	一度ロケットを月に到達 させれば次回から成功率 が上昇	子供を一人育てれば経験 にはなるが、下の子ども うまくいく保障はない											
レシピがよければ毎回ほ ぼ同じケーキが焼ける	ロケットの成功条件は毎 回必ず一緒	子供は唯一無二の存在、 個として理解しなければ ならない											

② 事例紹介「南砺市エコビレッジ構想について」

南砺市ブランド戦略部 企業誘致推進室長 久保剛志氏

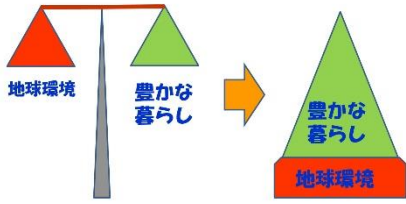
要旨) 南砺市エコビレッジ構想は、南砺市に伝わる「土徳文化」を次世代に継承する取り組みや支え合いによるまちづくりの取組を通じて、地域資源の循環や相互補完が可能となる人材育成プログラムや住民参加による自治組織形成を促進するとともに、これらを基金運営等により支えることで、SDGs も併せて更に進化させ「一流の田舎」を実現しようとするもの。【6つの基本方針】①再生可能エネルギーの創出 ②農林業の再生 ③健康医療福祉介護の連携④次世代の人材育成 ⑤ソーシャルビジネスの推進 ⑥新しい暮らし方の提案



【発表スライド】

<p>南砺市エコビレッジ構想 小さな循環による地域デザイン</p> <p>南砺市市民協働部エコビレッジ推進課</p> <p>①</p>	<p>なぜ今、エコビレッジ構想なのか</p> <p>経済優先社会への不安</p> <p>金融不安 株安を増幅</p> <p>自然の大きさといのちの尊さ</p> <p>人間関係の大切さ</p> <p>人と人、人と自然との関係を改めて考え直す必要がある</p> <p>②</p>
--	---

地球環境と豊かな暮らしを天秤にかけるのではなく
地球環境という規模の制約の上に心豊かな暮らしの形
をつくる



③

エコレッジ構想は、
南砺市が、地域が、人類が、地球が
50年後も生き残るために今すべきことを提案しています

一人一人が「かけがえのない大切なものとは何か」
ということを考えながら

ひとつひとつの選択を変えていくことが必要

「便利」+「思いやり(自然、人、地域、未来)」
= 50年後の未来へと繋がる選択

④

「南砺市エコレッジ構想」H25.3策定

【基本理念】小さな循環による地域デザイン

【基本方針】

- 再生可能エネルギーによる
地域内エネルギーの自給と技術の育成
- 農業の再生と商工観光業との連携
- 健康医療・介護福祉の充実と連携
- 未来を創る教育・次世代の育成
- ソーシャルビジネスやコミュニティビジネスによる
エコレッジ事業の推進
- 森や里山の活用と懐かしい暮らし方の再評価による
集落の活性化

⑤



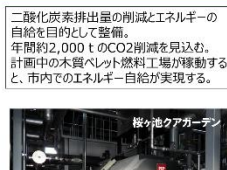
⑥

再生可能エネルギー推進事業

太陽光発電設備整備 (ヨツカケレ、桜ヶ池クアガーデン、南砺中央病院)
木質ペレットボイラー整備 (桜ヶ池クアガーデン、福光プールほか3施設)

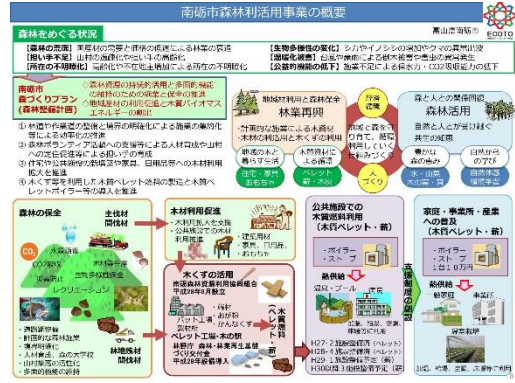


二酸化炭素排出量の削減とエネルギーの自給を目的として整備。
年間約47 tのCO2削減を見込む。
蓄電池も整備し、災害時における電力が確保され、避難所として自立した施設運営が可能。



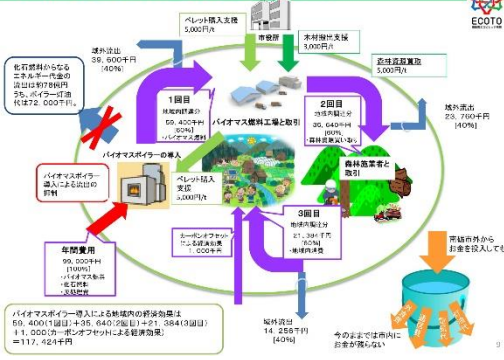
二酸化炭素排出量の削減とエネルギーの自給を目的として整備。
年間約2,000 tのCO2削減を見込む。
計画中の木質ペレット燃料工場が稼働すると、市内でのエネルギー自給が実現する。

⑦



⑧

南砺市木質バイオマスボイラーによる地域内資金循環



⑨



⑩

南砺市エコビレッジ構想推進モデル事業 「発酵バイオマス農業」 椈ヶ池バイオマス農業推進協議会



発酵ガスに含まれるCO₂には成長を促進させる作用があり、短期間で収穫や収穫回数が増加するなどの効果があった。また、作物が活性化されたことにより、腐りにくく、食味の良い作物が収穫できた。



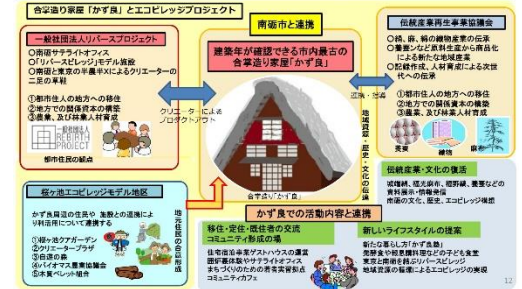
廃棄される木の皮を発酵させると、発酵による熱とCO₂等のガスが発生する。その熱をビニールハウスに取り込むことにより冬でも気温1.5度以上維持することができ、一年を通じた温室栽培が可能となる。

11

椈ヶ池合掌造り家屋「かず良」の活用プロジェクトの概要



- エコビレッジ構想の実現、循環型社会のシンボル、「新しいライフスタイル」を提案する情報発信拠点
- 既存の合掌造りのうち建築年が確認できる市内最古の合掌造り家屋「かず良」の改修と利活用
- 社会環境の変化により消滅した「薪布、畳草、神保布」など地域古来の伝統産業・文化の復活
- 農業一極集中の是正に向けた移住、定住者の地域活動の受け皿、住民との交流・コミュニティ形成の場



12

椈ヶ池合掌造り家屋「かず良」の運用



- エコビレッジ椈ヶ池モデル地区にある合掌造り家屋「かず良」は地域の伊勢谷友介が代表を務める一般社団法人リバースプロジェクトが所有し運営している施設です。
- エコビレッジ構想策定からかす良再生、エコ住宅ゾーン計画など、まちづくりにおいて連携してきました。
- SDGs 米栄都市において南砺市と、なみ青年会議所と3者連携協定を締結し実現を目指していく。

一般社団法人リバースプロジェクトの概要
リバースプロジェクトは「人間が未来の地球に生き残るために」という基本理念のもと、人々が持続可能な生活を営めるためのコミュニティが「リバースプロジェクト」が各地で展開されていくことを目指しています。
「リバースプロジェクト」は、未来志向型/地球環境志向型/社会福祉志向型を掲げています。
そこでは、農業・水産・エネルギー等で、可能な限り自給自足、あるいは、利用・消費量削減等を推進すること。また小規模の地理的コミュニティをベースにして、食料供給を行っていることが必要だと考えます。
さらに国内にあるリバースプロジェクトを連携させ、展開していくことを目指しています。
この目標のもと各自自治体、任意地域/専業、民間と協働し、そのモデルケースとなるまちづくり、及び活動を「地域資源」/「グラウンディング」/「市民参加」/「SDGs」/「若手実業家」という4つの柱の自前アプローチから行っています。

かす良での活動

- 南砺学かす良塾**
南砺の歴史・土産文化・伝統産業・生活など多岐、次世代につなげていくプログラム
- 子ども食堂**
地域の有識者などを利用した健康にやさしい安心な食卓の提供、食文化をつなげていく
- 新しい暮らしの提案**
地域産品による住宅や再生可能エネルギーの活用、安心できる養生法、助け合いの暮らしなど、新たな暮らし方を提案する
- 管理運営**
各自治体と協働、自然農法に取り組まれている方が実証3人で南砺市に移住され、かす良を管理運営します。風習やアソビ、地域コミュニティの場として利用していきます。

13



14

持続可能な開発目標 (SDGs) とは？

SDGs = Sustainable Development Goals
持続可能な開発目標
将来世代のニーズを損なわずに、現世代のニーズを満たす開発を進める

目標
世界全体で2030年を目指して明るい未来を作るための17のゴールと169のターゲット (+230~240の指標)



15

SDGs 成立の経緯

2000年9月
国連ミレニアムサミットで主に開発途上国に対する目標としてミレニアム開発目標 (MDGs) を採択
→対象が発展途上国など限られていたため思うような成果があげられなかった。

2015年9月
国連サミットでSDGsがすべての政府によって合意。前身となるMDGsと違ってすべての国、企業、人が取り組むべき目標として設定

16

持続可能な開発の3つの側面

- ・ 持続可能な開発は、将来の世代がそのニーズを充足する能力を損なわずに、現世代のニーズを充足する開発と定義
- ・ 持続可能な開発を達成するためには、**経済成長**、**社会的包摂**、**環境保護**という3つの主要素を調和させることが不可欠



17

SDGsのもうひとつの捉え方 - 5つのP



18



自治体がSDGsに取組む意味は？

1. 日ごろの活動が世界の目標に通じている/世界に先んじていることを認識できる
⇒市民の「誇り」「やる気」につながる
⇒活動の正当性や公共性（への貢献）を示すことができる
2. SDGsは共通言語
⇒異なるステークホルダーとの協働・連携につながる
⇒多様な国や姉妹都市等で、発展に持続的に貢献出来ることを示せる（開発途上国の開発戦略への結びつけもやりやすくなり、市場開拓にもつながる）
⇒目標によるタグ付け（同じ目標への活動を集める）、ベストプラクティスや課題の共有で、課題解決のスケールアップや連携を可能にする

19

エコレレッジ推進課

19



自治体がSDGsに取組む意味は？

3. サステイナブルな方向に政策で誘導できる
⇒財政支出の効率化につながる
→タテ割りに横くしをさすことで、効率化を図れる
→重点施策（例えば健康増進）と他の施策との関連を可視化しやすい
⇒国際目標と結びつけることで、従来やりにくかった施策がやりやすくなる/可視化しやすくなる
→ジェンダー平等、再生可能エネルギーの増大、食料廃棄物削減等
⇒「誰一人取り残さない」コンセプトで、人口減をストップし地方創生を行える

20

エコレレッジ推進課

20



自治体がSDGsに取組む意味は？

4. 企業のサステイナブルな取り組みやESG投資拡大の支援
⇒認証の活用やSDGsへのコミット表明企業に対してSDGs調達を促進したり、投資を誘導
⇒中小企業のサステイナビリティを応援
5. 将来のあり方から翻った活動が可能に
⇒変化の多い時代よりどころに
例：ガソリン車からEV車へシフト→中小企業の事業がシフトを余儀なくされる
⇒総合計画に盛り込むことで誤りのない自治へ

イノベーションとコラボレーションのたから箱

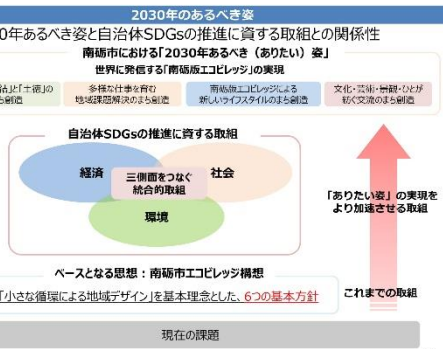
21

エコレレッジ推進課

21

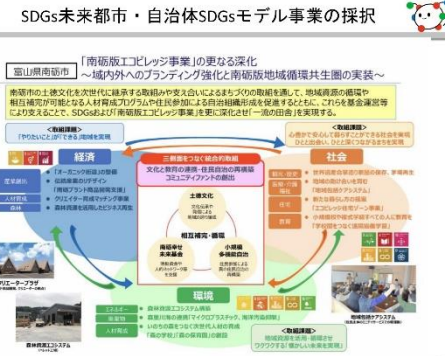


22



23

23



24

copyright © 2019 Mikiyo.Tanaka all Rights Reserved



経済面での取組	社会面での取組	環境面での取組
<ul style="list-style-type: none"> 地域ある格差縮小とコンテナ産業による地域経済の活性化 クレーナー育成マッチング事業 「オーガニック庄園」の発展 産地産品のリブランディング（南砺ブランド再構築事業） 森林資源を活用したビジネス再生 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の伝統文化と「商売らしさ」を正しく継承し、全ての人が健康で安心して暮らす社会の構築 高齢者の暮らしを支える「南砺版介護予防事業」 若者の就業支援 子育て支援 若者の就業支援 若者の就業支援 	<ul style="list-style-type: none"> 豊富な地域資源を最大限活用した循環型社会の形成 森林資源の活用 再生可能エネルギーの活用 資源の有効活用 資源の有効活用 資源の有効活用

25

25



26

copyright © 2019 Mikiyo.Tanaka all Rights Reserved

SDGs未来都市・自治体SDGsモデル事業の採択

令和元年度 SDGs未来都市・自治体SDGsモデル事業選定都市一覧

27 copyright© 2019 Miko.Tanaka all Rights Reserved 27

SDGs推進に関する連携協定 JCとリバーSP

持続可能な開発目標(SDGs)の推進に関する連携協定書調印式

28 copyright© 2019 Miko.Tanaka all Rights Reserved 28

「南砺版エコレレッジ事業」の更なる深化
～域内外へのブランディング強化と南砺版地域循環共生圏の実装～

SDGs(エスディージーズ)は世界が合意した「持続可能な開発目標」です。
南砺市は2030年を目標とし、「経済」・「社会」・「環境」が調和したまちなみの実現を目指しています。

市民のみなさんへ
SDGsには「17の目標」がありますが、南砺市の2030年を考え、これから進めることや守ること、協力したり、発信したり、行動するのに大切と思うことは何でしょうか。
自分達の子供や孫のことを考え、南砺市の大切なものは何なのか、この機会に話しあい、一緒に行動しましょう。

29

ご清聴ありがとうございました。

富山県南砺市

30

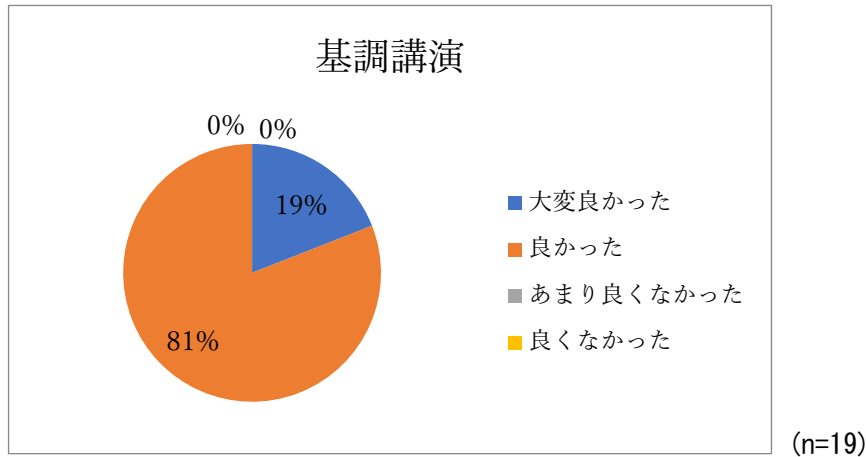
③ グループワーク

渡部氏の主導の下、グループごとに解決したい地域課題を考え、それに対するプロジェクトをSDGsホイールのワークシートを用いて、それぞれのゴールの関係性を考えながら（線で結びながら）検討し、発表して全体共有した。



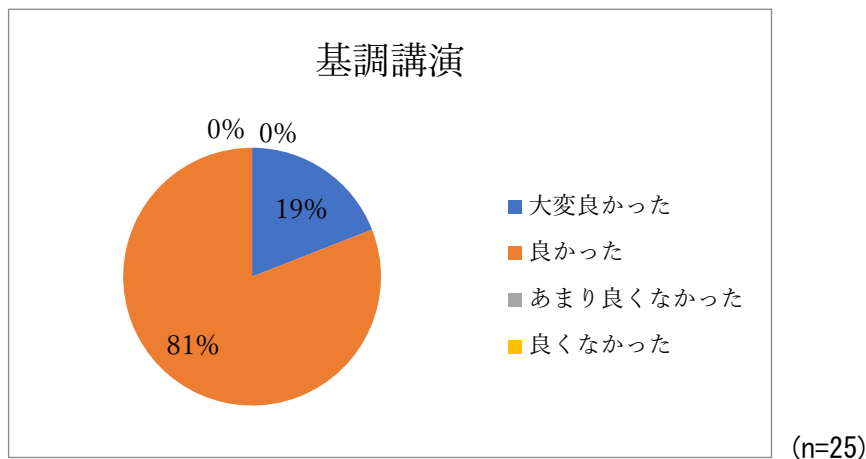
(ウ) 当日アンケート結果

① 見学会



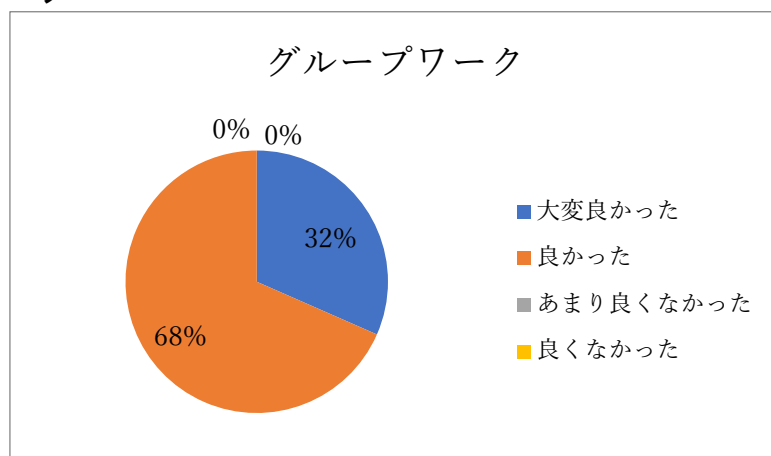
- エコビレッジペレット工場等すごいと思った。
- ペレット工場初めて見ました。自分の仕事と直結しない分野でしたがそれが逆に刺激になりました。
- 具体例を知ることができた。弁当が美味でした。
- 資源の有効利用を直接見ることができてよかった。
- 森・林業の問題地産地消の良さを目で見ることができよく理解できた。

② 基調講演



- SDG s が分かりやすく自分ごととして考えるきっかけとなった。
- SDG s の目標はとても大きな課題で取り組みのスタートが難しいと感じていたが、身近なところから入り口を考えたら良いと思った。
- アルメニアの例、あまり考えすぎずにできるものと知ることができた。
- 固いイメージの SDG s でしたが考え方を見方を学んだ。
- 身近に感じることができた。
- 分かりやすく説明されました。ありがとうございました。

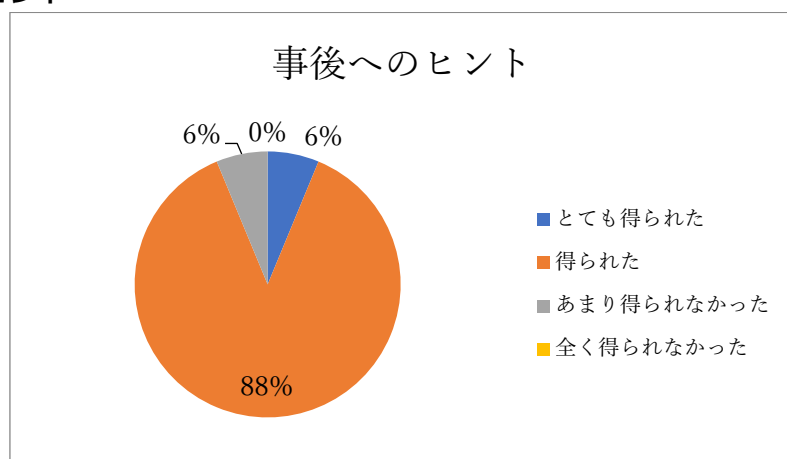
③ グループワーク



(n=25)

- いろんな職種と話ができてよかった。
- グループで話し合いをすることにより様々な発想が生まれることを感じた。
- グループワークを通して一人ひとりがどのような意見を持っているか知ることができ新しい考え方などが分かった。
- たくさんの方々の貴重な意見が聞けた。
- ワークシートの記入が難しかった。項目が難しい。
- 関連付けるといろいろつながっていると感じた。
- 考え方1～3のやり方がとてもわかりやすく、社内教育でもやってみようと思いました。
- 少し難しかった。
- 地域事例を聞いた。
- 民間の方と話すことで今までと違った目線でものを見ることができた。考え方が変わった。
- 民間事業者の方のアイデアを伺えてよかった。

④ 事後へのヒント



(n=25)

- 「これ」という決まりは無く自由な発想でグループワークをしました。
- いろいろお話が聞けてよかったです。
- グループワークでの意見交換を通して視点が少し広がったような気がする。
- グループワークを通して南砺市の問題点を考えることができた。自社のSDGs目標を考えるきっかけとしたい！
- ヒント、考え方が得られました。よく考えて仕事につなげたいと思います。
- 今あるものからできることから動いていこうと思いました。

- 今後自分のできることを考えていきたい。
- 市外の方の目線で南砺市の優れた点、産業、モノを教えてもらった。
- 他の企業等いろんな方の考え方を知った。

⑤ 全体を通じて

- ありがとうございました
- とても貴重な時間でした。ありがとうございます。
- 移動時にややスムーズに行かない部分があったように思いました。全体にはすばらしいセミナーでした。
- 一日多くを学べました。また、南砺市の魅力を存分に感じました。ありがとうございました。
- 回数を増やしてほしい。

イ 黒部市

(ア) 開催概要

- 日時：2019年11月28日（木）13:30～16:30
- 場所：立山黒部ジオパーク交流施設 わくわく広場うなジオ
- テーマ：同時解決事業
- 講師：長井一浩氏（一般社団法人 Green Dawn Project※ 理事長／NPO法人 明日育 常務理事・事務局長）
- NPO法人 明日育／ 協力：大高建設株式会社、一般社団法人でんき宇奈月、宇奈月自立塾
- 参加者：38名18団体（※前年度参加団体、★南砺市セミナー参加団体）

団体名	参加者数
富山県※	1
南砺市※★	1
北酸株式会社※★	2
大高建設株式会社※★	2
黒部市社会福祉協議会※	1
一般社団法人 立山黒部ジオパーク協会※	1
YKK（個人参加）	1
とうざわ印刷工芸株式会社	1
でんき宇奈月	3
宇奈月自立塾	12
株式会社 延楽	2
森のエネルギー研究所	2
日本林業技術協会	1
富山県立大学	4
有限会社 西部トラベル	1
JICA 北陸	1
お酒のお宿「喜泉」	1
NPO法人 明日育	1

(イ) 内容：

① 基調講演「Green Down Project とSDGs」

一般社団法人 Green Dawn Project 理事長 長井一浩氏

要旨) Green Down Project は羽毛を扱う企業や関係者と協力してリサイクル可能な羽毛製品の回収と製品化・流通を進めているプロジェクト。障がい者を雇用する仕組みで、環境課題と経済課題、福祉課題の同時解決が可能。繋がり合うことで新たな価値が生み出される。そのためには、相手を自分を「知る」「考える」ことから始める。利害で、参加型で繋がり、常識にとらわれない発想で、小さなモデルから始め、役割を分担しながら共創。何よりも「楽しい」ことが一番。



【発表スライド】

<p>①</p>	<p>②</p> <p>長井一浩って？ 三宅新が</p> <p>出身地は三重県松阪市 元 松阪市社会福祉協議会 特定非営利活動法人 明日育 常務理事 支援プロジェクト会議 (通称: 支援P) 一般社団法人 Green Down Project 理事長 赤い羽根共同募金モデル事業パートナー</p> <p>など</p>
<p>③</p>	<p>④</p>



年率4～5割の増加ペース

ネット販売の急速な普及が市場拡大を後押ししている。

2019/07/26 日本経済新聞 電子版より

⑤

グリーンダウンプロジェクトって何？

グリーンダウンプロジェクトの設立とその経緯や目的について語る

WHAT A GREEN DOWN PROJECT?

⑥

理事紹介

長井一浩 代表理事

株式会社大塚の海外担当部長として、平成23年4月の株式会社大塚の海外担当部長として、東洋のビジネス「アパレル」の海外展開を推進する責任を負った。2006年より株式会社大塚の海外担当部長として、東洋のビジネス「アパレル」の海外展開を推進する責任を負った。

長澤 恵美子 理事

1984年に株式会社大塚に入社。2009年から海外担当部長として、東洋のビジネス「アパレル」の海外展開を推進する責任を負った。2019年より株式会社大塚の海外担当部長として、東洋のビジネス「アパレル」の海外展開を推進する責任を負った。

橋本 崇昌 理事

2006年に株式会社大塚に入社。2009年から海外担当部長として、東洋のビジネス「アパレル」の海外展開を推進する責任を負った。2019年より株式会社大塚の海外担当部長として、東洋のビジネス「アパレル」の海外展開を推進する責任を負った。

川本 健太郎 理事

2006年に株式会社大塚に入社。2009年から海外担当部長として、東洋のビジネス「アパレル」の海外展開を推進する責任を負った。2019年より株式会社大塚の海外担当部長として、東洋のビジネス「アパレル」の海外展開を推進する責任を負った。

竹村 伊央 理事

2006年に株式会社大塚に入社。2009年から海外担当部長として、東洋のビジネス「アパレル」の海外展開を推進する責任を負った。2019年より株式会社大塚の海外担当部長として、東洋のビジネス「アパレル」の海外展開を推進する責任を負った。

⑦



平成27年4月3日 設立

◀羽毛を扱う企業や関係者と協力してリサイクル可能な羽毛製品の回収と製品化・流通を進めていく

設立の背景

羽毛は動物の体毛から採取された再生可能な資源ですが、多くはゴミとして廃棄されてきました。また、畜産の高度化を背景に羽毛の処理のみに用いた回収を削減し、依然としてライブハンドピッキングが中心で行われている現状があります。また、人への影響が懸念される廃棄物処理も必要を挙げられます。その結果として、環境に優しい回収システムを確立し、必要に応じて回収することを目指し、羽毛製品の回収・製品化のシステムづくりを目的としてGreen Down Projectを立ち上げました。この取り組みに賛同する企業を募り、リサイクル羽毛の品質向上に貢献し、発展を促しています。



⑧



理念・ビジョン

日本国内で羽毛を循環させるしくみを確立し、その普及をめざしています。

ミッション

Green Downは清潔で、安心して使用できる素材であることを広く生活者を知ってもらい、羽毛の回収と再利用への取り組みを会員企業や団体などと協働し社会に浸透させることをミッションとしています。



⑨

羽毛回収の仕組み、技術と生産体制について

～羽毛回収のシステム～

私たちが回収し、「Green Down」を作ります。あなたのチカラが必要です。

〈羽毛循環サイクル社会〉

一企業の責任だけでなく、「羽毛循環サイクル社会」を実現させます。羽毛に関わる企業をはじめ、地域社会、そして生活者一人ひとりの理解と協力で作る羽毛循環システム。それを推進していくのが「Green Down Project」です。羽毛製品はGreen Down Projectに加盟するメンバーによって、回収・精製され、再び新たなGreen Down製品（リサイクルダウン製品）に生まれ変わります。



⑩

世界が変わる？

「羽毛循環サイクル」の実現は、豊かな社会を生み出します。

障がい者就労支援・地域貢献

羽毛循環システムが障がい者の雇用が生まれます。私たちは、障がい者就労の機会を拡大し、羽毛循環システムのしくみを構築します。障がい者の自立・共生・社会を支える取り組みで、日本社会に貢献の輪を広げる活動を行っています。

環境保全

羽毛サイクルは環境を守ることができます。羽毛はハードワランとリサイクル繊維でできており、1.0kgの羽毛を減らすと約1.8kgの二酸化炭素が削減されます。ごみとして燃やさずリサイクルすることで、それだけ長い間、炭素を羽毛の形で固定できるので、二酸化炭素の排出を抑制できます。

羽毛の安定供給

羽毛循環システムは安定的に安全な羽毛を供給します。Green Down（グリーンダウン）は新毛と違い、廃棄の廃棄物やインフラ等による環境汚染による影響を受けにくく、安全な製品が生まれます。そのため、安定的に安全な羽毛の供給が可能です。



⑪

Green Down Project for SDGs



⑫

I. SDGsとは？



Green Down Project

13

持続可能な開発のための 2030アジェンダ

- 2015年9月の国連サミットで193の国連全加盟国の賛同を得て採択された、持続可能な社会を目指すマスタープラン（基本計画）、**世界の共通言語**
- 持続可能な開発目標（SDGs）を提示
 - 17目標、169ターゲット、230指標の三層構造
- 進捗状況の**モニタリングと評価**（法的拘束力なし）
- SDGsへの取り組みやフォローアップを行う**主たる責任は各国の政府**にある（含 国内評価指標の開発）
- 民間セクターには、**創造力とイノベーション**の発揮を期待

Green Down Project

14



「誰一人取り残さない」

Green Down Project

15

II. Green Down Project for SDGs



Green Down Project

16



Green Down Project

17

持続可能な生産と消費のパターンです。



羽毛サイクルは、持続可能な生産と消費のパターンです。Green Down Projectは、「使わなくなった羽毛製品を捨てない」という消費者の行動から始まる、バリューチェーン全体におけるしくみです。明確な基準や統一の表示を通じて、消費者に誠実な情報提供を行っています。

Green Down Project

18

羽毛回収の仕組み、技術と生産体制について

〈羽毛循環サイクル社会〉



羽毛循環サイクル社会の実現には、あなたのチカラが必要です。

Green Down Project

19

捨てないで!モッタイナイ!

いま、ダウン(羽毛)の供給量が減っています。ダウン(羽毛)は限りある資源です。



Green Down Project

20



21



Green Downとして生まれ変わった羽毛は、さまざまな製品として再び生活者の方々のもとへお届けしています。

Green Downの製品には、Official Name Tag (ドスネーム) と Green Down Tag (「G.D.T.」) がついています。



22



環境を守ることができます。



羽毛サイクルは環境を守ることができます。Green Down Projectは、羽毛循環サイクルを構築することを通じて、CO2の排出を抑制することを目指しています。温室効果ガスの排出量を抑えることで、気候変動の具体的な対策となります。

23



3,200,000

24



国内での新規羽毛布団の販売枚数
320万枚

※日本羽毛製品協会

25



940,000

26



東京23区だけで年間94万枚
全国だと何枚になるのか？
この中の何%が羽毛布団？



ほとんどが焼却されている

27



東京23区で廃棄される布団の推移
(清掃事業年報(東京23区)より)

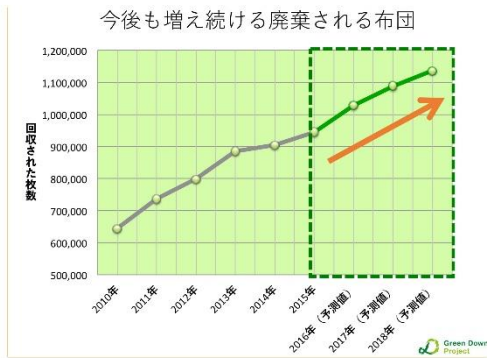
年度	2012	2013	2014	2015
枚数	799,144	885,385	904,733	944,529

粗大ごみとして処理される量

3年で約15万枚、約18%の増加

28





29

副産物として
 新毛で利用できる羽毛の量は減少
 羽毛の需要は年々上昇
 廃棄される羽毛布団は年々増加
 リサイクルされている羽毛はまだわずか
 まだまだ極めて高いポテンシャルがある

30



31



32



33



34



35



36

柔軟かつ強靱な羽毛産業基盤を構築します。



羽毛サイクルは、柔軟かつ強靱な羽毛産業基盤を構築します。Green Down Projectは、質の高い羽毛の安定的供給を可能にします。羽毛の需要が年々増加する中、新毛として利用できる羽毛の量は安定的ではありません。羽毛洗浄企業の技術革新により、質の高い再生羽毛を供給することができます。



37



Green Downとは？



Green Downとは、一度使用された羽毛製品を国内で回収し、中から取り出した羽毛を日本の工場内で洗浄後、再度処理したリサイクル羽毛のことです。日本では今まで、製品に使用した羽毛を使い捨てにしていた。しかし、羽毛は適切な手入れをすれば100年以上は使い続けることができる循環資源です。きちんとした品質基準を決めたりリサイクル羽毛です。



38

Green Down Projectの取り組みと河田フェザーの独自技術&恵まれた環境で生まれた嬉しい品質基準をクリアした高品質なリサイクル羽毛



精製前

精製後

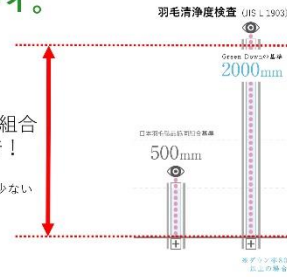


39

生まれ変わった羽毛 (Green Down) は、新毛よりキレイ。

日本羽毛製品協同組合の品質基準の4倍！

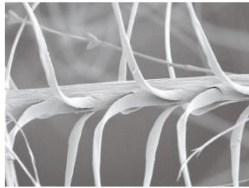
羽毛表面の汚れや不純物が少ない



40

Green Downの特徴

● 洗浄除塵後羽毛の電子顕微鏡写真



画像提供：河田フェザー株式会社

新毛を使用した羽毛製品は使っている間に羽毛同士が絡み合い、羽根に張り付いている小羽の根元が広がり、目に見えないアカのようなものがだんだんと増えていきます。電子顕微鏡で見ると、このアカのようなものは羽根の間に詰まっていた繊維の塊が原因です。そうした使い古した羽毛製品を回収し、解体して中から羽毛を取り出した上で、洗浄・精製加工をするので新品よりもきれいな羽毛となります。



41

羽毛は100年使える循環資源です



42

障がい者の雇用が生まれます。



羽毛サイクルで障がい者の雇用が生まれます。Green Down Projectは、障がい者や働きづらさを抱えた人々に就労の機会を提供することを通じて社会参加を促していくことを目指しています。持続可能な経済成長の実現のため、包摂的で働きがいのある仕事づくりを行ってまいります。



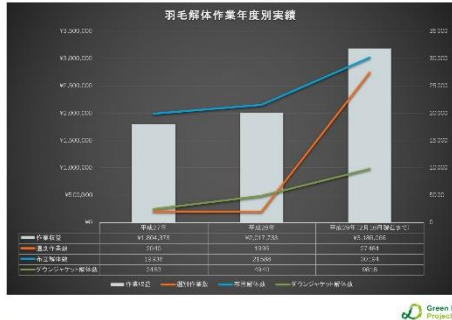
43

作業風景



44

解体作業コスト（成果）



45

解体作業能力（成果と課題）

1日あたりの解体能力	300枚
1日あたりの解体実数	191.44枚
100%能率比	63.80%
1か月あたりの解体能力	6000枚
1か月あたりの解体実数	3637.36枚
100%能率比	60.62%
1年あたりの解体能力	72000枚
1年あたりの解体実数	40012枚
100%能率比	55.57%
平成29年度布団解体実数	30194枚
平成29年度D J 解体実数	9818枚

46

仕事を続ける為の仕組み作り（思い描く5年後）

引きこもっていたTさんが…
多重債務者のOさんが…

羽毛解体作業を通して、地域貢献できる社会を構築する。
そんな地域社会を作る為に、皆さんと共にその仕組み作りを考えていきたい。

47

「ユニバーサル・ワーク」の実現を目指して

自然環境しかり労働環境の改善・強化

●企業の障害者雇用率を高める取り組み



●就労困難な人々の労働による社会参加の促進

* 都市部：派遣型作業所の創設⇒本来業での障害者雇用

* 農村部：自治体ないしは社協・既存法人との協働

48

「仕事おこし」として（研究レベル）

○製品から羽毛を取り出す作業所

- ・流通・運輸システムをもつ企業との連携
- ・ダブル・機械メーカーから派遣

○防災関連商品の製造

- ・Green Down を使用した製品の製造
- ・被災地の障害者就労支援事業所（生活困窮者含む）とアウトドアメーカーとの協働事業
- ・車中泊とともに各自治体でプール（災害備蓄品）
- ・使用後再度リサイクルシステムへと送っていく。

49

羽毛回収実績とGreen Down使用実績

羽毛回収実績及び予測	2014年	・・・	@5,000Kg
	2015年	・・・	@10,000Kg
	2016年	・・・	@15,000Kg
	2017年	・・・	@25,000Kg
	2018年	・・・	@30,000Kg
	2019年	・・・	@60,000Kg

Green Down 使用量実績及び予測	2015年	・・・	@5,800Kg
	2016年	・・・	@4,300Kg
	2017年	・・・	@6,200Kg
	2018年	・・・	@28,000Kg
	2019年	・・・	@30,000Kg（4年で約5倍）

50

各地に拠点を。

51

協働で付加価値を創造するプラットフォームです。



羽毛サイクルは、協働で付加価値を創造するプラットフォームです。
Green Down Projectは、羽毛に関わる多様な企業、地域社会、そして生活者一人ひとりの理解と協力により羽毛循環サイクルのしくみがつくられます。
多様な組織や人々が関わるからこそ生まれる創造力とイノベーションを発揮していきます。

52

今日のCSRにおいて重要な要素

- ★Sustainability 持続可能な社会の実現
持続可能な事業
持続可能な生産と消費
- ★Accountability 説明責任
透明性の確保
相互の監視
- ★Human Rights 人権の尊重
誰一人取り残さない
(動物福祉)
- ★Partnership マルチ・ステークホルダーによる
課題解決



53

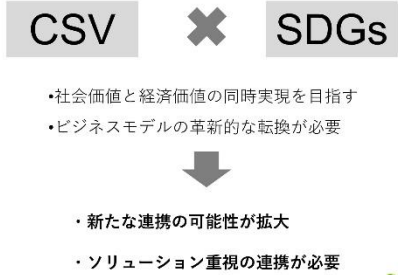
今後の方向性：企業の関心

1. CSR・社会貢献活動・CSVの整理・役割分担
- CSRとは
 - ・企業活動全体に統合されるもの
 - 社会貢献活動とは
 - ・本業だけでは解決できない社会課題へのアプローチ
 - CSVとは
 - ・Creating Shared Value (共有価値創造)
 - ・ステークホルダーとの共有価値創造を事業活動に位置づけること
 - ・社会課題の解決策の規模を、市場メカニズムを活用して拡大すること



54

サステナビリティを追求する価値創造



55

競業から共業へ

競争から共創へ

持続可能で包摂的な社会の実現
に向けて

循環資源、共有価値創造という考え方は
今の時代に不可欠です。
循環型社会の実現が、
環境にもモノにも人にも優しい社会を創ります。



56

第3回グッドライフアワード
(「企業と社会」特別賞受賞)



57

エコプロアワード
(環境賞受賞)



58

参加企業団体

@100の企業や団体が参加



59

繋がり合うことによって
新たな価値が創出される。



60

<p>61</p> <p>それって難しいの？</p> 	<p>62</p> <p>確かに難しさもあります。 しかし、</p> 
<p>63</p> <p>課題解決には “つながる” が効果的</p> 	<p>64</p> <p>どのようにつながり、 つなげばいいのか…</p> 
<p>65</p> <p>その多くは 「知る」 ところから</p> 	<p>66</p> <p>つまり…</p>  
<p>67</p> <p>知ろう とする意識</p> 	<p>68</p> <p>とにかく知ることで、 アプローチ がかけやすい</p> 

でも相手を知る前に、
ちゃんと自己紹介できますか？

69



自分のことを知らないと、
自己紹介はできない。

※知らない人のことを紹介できない。

70



連携と協働って、
自分と相手のことを
「考える (想像する)」作業。

71



そして、

72



モデルを創る

- コツ！
- ・新しいチャレンジ
 - ・小さな成功体験！

73



参加型で創る

- コツ！
- ・縦割りではなく、横への広がる意識

74



利害で組む

- コツ！
- ・テーマで組む
 - ・関係者で組む
 - ・解決型で組む

75



既存の仕組みにとらわれない

- コツ！
- ・2つの "想像" と "創造"

76





② 事例紹介：「地域内エコシステム@宇奈月温泉」

一般社団法人 でんき宇奈月 理事 堺 勇人氏
 大高建設株式会社 山本 健太郎氏
 一般社団法人 日本森林技術協会 川井 祐介氏

要旨) 地域材を薪として活用し、温泉施設等の熱エネルギーに活用する仕組みを、生活自立支援団体「宇奈月自立塾」と連携して構築していこうとするプロジェクト。現状は実証試験段階ではあるが、取組を通じて互いに学び気付き合い、各主体が主体的・自立的になりつつある。

